

世界結核デー記念フォーラム 参加報告

日時：平成22年3月4日(木)17:45～19:35

場所：東京・新橋 ヤクルトホール

感染症危機管理とリスクコミュニケーション ～新型インフルエンザ対策を中心に～

名古屋市中村保健所
所長 松原 史朗



3月4日(木)、第15回国際結核セミナーに引き続きヤクルトホールで世界結核デー記念フォーラムが開催された。メインテーマは「結核のない世界～結核対策は公衆衛生政策の原点～」で、前半は自治医科大学教授で結核予防会顧問でもいらっしゃる尾身茂先生が感染症の危機管理について講演された。

尾身先生は国の新型インフルエンザ対策専門家諮問委員会の委員長を務めておられることもあり、昨年4月からの新型インフルエンザ対策が話の中心となった。検疫などの水際作戦、強毒性から弱毒性への対応の変更、学校閉鎖、発熱相談センターや発熱外来の設置、ワクチン接種などの施策に関して、その基となった考え方や先生の評価についてお考えを伺うことができた。例えば学校閉鎖については「水際作戦に比べて有効性が明確で関係者の合意もあったため広範囲に実施した、その結果学校から地域に感染が広がらず死亡率低下に寄与したと思う」とのお考えであった。またワクチンについては「10mlバイアルは製造効率が高いので早く供給できる、1mlバイアルにすると約3週間の遅れが見込まれたため、早く接種できることを優先した」とのお話であった。

新型インフルエンザ対策についてはさまざまな評価がある。第一波が終息した現時点で振り返ってみると反省点も多いし、初期には過剰な対策もあったように思う。ただ検証にあたっては結果論ではなく、当時の状況を考慮しなくてはならない。科学的側面のみでなく、施策の社会的影響や経済的側面にも配慮する必要がある。それらを考えると私は判断の多くが納得できたし、未知の点が多い中で困難な判断をされた方々に尊敬の念を感じた。講演の最後に尾身先生は、「改善すべき点はあるが、わが国の新型インフルエンザによる死亡率は諸外国に比べて極めて低い、これは対策の効果ではないか」と評価された。現場で汗を流した多くの関係者にとって大きな誇りになる評価であり、たいへんうれしく拝聴した。

後半は、NHKジャーナリストの虫明英樹さんと女優の石井苗子さんも加わって「感染症危機管理～リスクコミュニケーションの重要性を考える」と題した対談が行われた。



石井氏の司会により虫明、尾身、両氏の対談が行われました

石井さんの巧みな司会で、尾身先生と虫明氏がそれぞれの立場から新型インフルエンザ対策について話し合われた。「水際作戦が過剰だったか」という議論に始まり、日米の国民性や医療制度の違い、マスコミと行政の情報の間を埋めるコミュニケーションの必要性、さらに「マスコミは国民にリスクを正確に伝えられたか」へと話が広がった。虫明氏は「刻々と変わるリスクの変化を十分伝えきれなかった」ことを反省点に挙げられたが、マスコミの方々も国民に正確な情報を伝えようと誠実に努力しておられる姿はとても印象的であった。最後に尾身先生が「今回の流行で国も地方もマスコミもそれぞれが貴重な経験をした、今後は皆が各々の責務を果たすと共に協力して危機管理に取り組んでいかななくてはならない」とまとめられ閉会した。

現在新型インフルエンザ対策の検証が国や自治体で始まっているが、今回のフォーラムは対策を省みる上でとても参考になるものであった。また結核を始めとする感染症対策に携わる者にとっても非常に示唆に富んだ、有意義な内容であったと思う。